

中学・高校における英語会話について

鈴木 純 一

従来、日本の英語教育において、英会話は比較的重要視されず、その主流は訳読であった。英会話に対して教師や世間の関心が高まってきたのは、戦後のことである。これは、アメリカ軍の駐留、観光やその他の目的で来日する外国人の増加、海外渡航をする日本人の急激な増加など、日本人が外国人と接触する機会が年を追って急速に増えてきたためである。この関心の高まりと共に、英会話をとりまく環境も著しく好転してきた。中でも(1)テレビやラジオによる英会話の放送。(2)LL, テープレコーダー、カセットテープなどの教育機器が学校における英語教育に導入されてきたこと。(3)アメリカン・フィールドサービスやロータリー・クラブなどの恩恵により、少数ではあるが、生徒が海外で英語を学習する機会をもつようになったこと。(4)中学校、高校の英語教育の目的の中に、「聞くこと。話すこと」に対する能力の養成が掲げられ、期待されていること。(5)英語熱が高まり、小学生の中でも英会話の訓練をうける子どもが増えてきたこと。(6)外人教師の数が増えてきたことなどは、以前には想像もされなかったことである。しかし、この英会話ブームの到来にもかかわらず、高校や大学の卒業生は、話し言葉による英米人との **Communication** において、その能力の貧弱さを暴露し、世間の期待を裏切るようになった。その結果、世間の英語教育及びその成果——特に実用的な面における——に対する批判が広まってきた。すなわち、「中学校から高校、あるいは、大学まで6年も8年もの長い間、英語の勉強に莫大な精力を使ってきたにもかかわらず、簡単な英会話もできなければ、又、短い手紙も書けないというのは、何故なのか。又、それでよいのか」という批判であ

る。この批判の代表的なものは、平泉渉氏による外国語教育改革試案である。氏は、又、「本当に外国語を必要とする者だけが外国語を習得すればよい」という意味のことも言っている。当時(昭和48年)、この試案は、英語教育者にとって大きなショックであった。ただ妙なことに、当時、「英語教育」とか「英語青年」などの英語関係の雑誌にも、又、新聞にも、これに関連した記事があまりみられなかったことである。ある人は内心これを認め、ある人は冷やかにこれを黙殺したのだろうか。いずれにせよ、教養英語は別として、実用英語の成果があまりあらわれていないという事実を認める人は、現在でも相当にあるものと思われる。

それでは、日本の英語教育において、音声訓練が全く等閑に付されてきたのだろうか。英語教育における大先覚者岡倉由三郎(1868~1936)は、個々の語の発音はもちろん **intonation** の重要性を強調し、又、神田乃武(1860~1923)は、英語による英語の授業すら推唱している。なお又、大正11年に来日し、同12年に英語研究所を開設した英人パーマーは、**Oral Method** (英語による英語の授業)を提唱し、この教授法を全国の中学校に普及させようと懸命な努力をした。彼は、教室における教師・生徒の英語の発音に厳しい態度をとり、教師の、生徒に向かって話す英語のスピードは、**native speaker** のスピードと同じでなければならないと言っていた。この教授法は、当時の東京高師附属中学校、福島中学校、湘南中学校により真先に採用され、これらの中学校には、全国からの授業参観者が集まった。そして、この **Oral Method** は、新しくかつ珍しい教授法として全国に広がってゆくかにみえた。ある中学校で新任の英語

教師が早速 Oral Method で授業したところ、生徒たちは、「英語をしゃべる先生が来た」と言って驚き、町の評判になったという笑い話があるほど、英語の教師が英語をしゃべることは、当時、珍しいことであった。しかし、彼が昭和11年、日本を離れると、Oral Method は次第に影が薄くなり、現在、全国でどのくらいの中学や高校がこの教授法を受けついでいるかは、明らかでない。しかし、この教授法は、約半世紀も前に脚光をあびた教授法であるが、将来も日本の英語教育史にその名を残すであろう。以上、日本の英語教育において、音声訓練が必ずしも、軽視されたわけではないということ、又、時には極めて重要視されたことについて、その一端を述べたが、一般的傾向として、訳読の方が重要視されてきたことは否めない。

次に、中学校及び高等学校における英会話の現状を眺め、若干の感想を述べたい。

中学校の場合——中学校では一冊の教科書によって、「読むこと」「聞くこと」「話すこと」「書くこと」以外に、基礎的な文法も指導しなければならないため、「聞くこと」「話すこと」の訓練に多くの時間を使うことができない。したがって、授業の初め、あるいは、終わりに10分から15分ぐらいの時間を英会話に利用しているのが現状のようである。発音指導の留意点として学習指導要領は、「はっきりした発音で正しく音読すること」をあげている。最近、LL 教室を利用した英語の授業も多く、教科書に準拠したカセットテープの利用も盛んになってきている。又、生徒の中には自分のカセットテープで予習、復習をしたり、NHK の「基礎英語」「続基礎英語」に耳を傾ける熱心な生徒もクラスで数人はいるそうである。〔感想Ⅰ〕初級英語を学習する段階において、単語を正しく発音する習慣をつけることは、英会話のみならず英語そのものの学習にとって最も重要なことである。この点初めて英語を習う生徒を指導される教師は、特にご留意を願いたい。発音がまずくて会話が上手であるとか、発音には誤りが多いが英語はよくできるという生徒は、まずないと言ってよい。発音について困ったことの一

つは、生徒が英語をローマ字風に読む傾向が極めて強いということである。試みに、walk と work を並べて発音させてみたら、正しく発音する中学生は、どのくらいあるであろうか。

〔感想Ⅱ〕二年生用、三年生用の教科書の欄外には、各課ごとに初めての単語が紹介され、その単語の下に発音記号が示されている。しかし、学習指導要領には、発音記号のことが明記されておらず、現場では、「教えてもよい」「教えた方がよい」程度に理解されているので、発音記号の読める生徒も読めない生徒もあることになる。したがって、生徒が家庭で予習のために辞書をひいても、単語の意味は分るが、発音は分からないことになる。そのためであるかどうか分らないが、最近の中学生向きの英語の辞書では、発音記号のほかに片仮名、平仮名で読み方が示されている。これは、いかがなものか。片仮名、平仮名によって英語の発音を示すことには、問題があると思われる。

高等学校の場合——高校の場合では、その学校の種類、生徒の能力・進路などが異なっているため、その学校の英語教育の中で、どのように英会話が実施されているかは、それぞれ異なっている。殆んど高校では教科書に附属したカセットテープにより、聞く能力の基礎を養っているが、生徒が英語を話す機会はあまりないというのが実状のようである。又 LL 教室を備えたり、外人教師が授業をする高校は現在のところ、極めて少数である。又、普通科の高校では、生徒は受験英語に熱心のあまり、英会話に対しては中学生ほど関心を示さないようである。昭和57年度から実施される新しい学習指導要領では、英語の科目として英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語ⅡA、英語ⅡB、英語ⅡC が示されている。英語Ⅰ・英語Ⅱにおける目標は、「英語を聞き、話し、読み、書く基礎的な能力を養うこと」となっている。又、英語ⅡAの目標は、「……………英語を聞き、話す基礎的な能力を一層伸ばすと共に……………」となっている。要するに高校一年生・二年生において英会話の基礎的な能力をつけ、二年生・三年生において、英語ⅡAを中心としてこの能力を一層伸ばすこと

が意図されている。したがって、英語ⅡAにおいては、英会話が最も重要視されることになる。「感想Ⅰ」高校における英会話が問題となるときは、必ず大学入試が話題となる。生徒は、大学入試に必要な英語と会話の英語は全然別なものと考えているから、英会話に熱が入らないのだと言われている。もっとも、外国語大学や英文学・英語学科の入試には、問題の一部として **Hearing** が採用されていることが多いが、これは、大学全体からみれば、ごくわずかの部分である。したがって、英語の音声を聞くということの重要性を認識させるために、せめて共通一次試験に英語の問題の一部として **Hearing** を加えたいかがなものであらうか。

「感想Ⅱ」英会話の訓練を効果的に行う場合には、生徒数は10名前後が適当であり、生徒の能力にあまりむらがないことが必要であると普通言われているが、40名をこえる生徒に英会話の訓練を充分に行うことは、実際問題として困難である。だからと言って、能力別に少数グループに生徒を分けることは、教室の数、教師の数に制限があり、不可能である。このような面では、中学校も同様である。

以上、中学校、高等学校における英会話の現

状とそれに関する二、三の感想を述べたが、最後に英語教師の研修に関し、一点だけ述べておきたい。最近、県の教育委員会では外人教師（英語指導主事助手）が採用され、英語教師の研修会での色々な指導・助言にあたったり、県下の中学校や高校を訪問して、教師の質問にこたえ、又、その指導にあたっている。（全国で20数県との由、費用は国と県とで折半）そのほかにも県内の高校や大学で教鞭をとっている外人教師が少なくとも3・4名はいると思われるので、これらの外人教師の援助により、英語教師を対象とする英会話の **intensive training** を目的とした研修会を幾度も開催されることが必要だと思う。なお、教師の英会話を指導する人は、必ず英・米人でなければならない。中学校や高校の生徒の場合とは違って教師の場合は、はるかに高い程度のものであり、又、参加者が満足するような訓練であることが必要であるからである。現に夏休みを利用して海外における英語研修会に自費で出席する教師の数が、逐年増えていることを考えれば、各県の教育委員会は、その実現に努力すべきではないかと思われる。